

受験 番号				
氏名				

二〇二三年度 二月一日 入学試験 国語問題

国語の注意

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

答えは解答らんからはみ出さないように書きなさい。

字数の指定がある場合は、句読点や記号なども一字に数えなさい。

【試験についての注意事項】

- 1 机の上に出してよいものは、次の三つです。それ以外のものはカバンにしまってください。
 - ① QRコードシール と 受験票（机の左上におきます）
 - ② えんぴつ数本（シャープペンシルも可・色ペンやマーカー、定規の使用は不可）
 - ③ 消しゴム
 - 2 次のものを持ってきた場合は、カバンにしまってください。また、休けい時間中も使用してはいけません。
 - ① 腕時計・置き時計など（音が鳴らないようにしてください）
 - ② 携帯電話・スマートフォン（電源を切ってください）
 - ③ 腕時計型の情報端末（Apple Watch など）
- ※ 許可なく携帯電話・スマートフォンや腕時計型の情報端末を使用した場合、不正行為とみなすことがあります。
- 3 机の中には、何も入れないでください。
 - 4 チャイムが鳴ったら、次のことを完了してから始めてください。

問題用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入してください。

解答用紙 ↓ 受験番号 と 氏名 を記入し、QRコードシール を貼ってください。
 - 5 問題についての質問は、いっさいできません。
 - 6 気分が悪くなったなら、すぐに申し出てください。
 - 7 物を落としたら、自分でひろわず、手をあげてください。

次の文章は、戸森しるこ『コロノナカノノ』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

寧音(わたし)は中学二年生の女子で同じクラスの女子の活発で誰からも好かれる靱山(おまやま)それぞれ癖のあるまりもやヒッキー(比企さん)と仲良くしている。わたしには生まれる前に亡くなった双子の妹(野乃)がいたが、まりもにはこのことを話せていない。また母(奈葉ちゃん)には近々赤ちゃん(わたしの妹)が生まれる予定である。

水族館に行きたいといただいたのは、まりもだった。

「インギンチャクが見たいの」

たしかそういつていた。

インギンチャク？

わたしも靱山も、ピンとこなかった。インギンチャク？ イルカとかペンギンとかではなくて？ なんだかまりもらしくなくない？ たとえばヒッキーがインギンチャクを見たいというなら、なんとなくわかる気がするけれども……なんてことをいうのは、なんだかヒッキーに失礼かもしれないし、インギンチャクにも失礼かもしれない。

「いいけど」

戸惑いながらも、靱山はそう答えた。

わたしはといえば、まりもが水族館に誘っているのは、きつと靱山だけなんだろうとサツして、うんざりしていた。夏ぐらいから、まりもはたまにそういう接し方をしてくるから。

「それってわたしも行っていないの？」

わたしが投げやりに確認すると、当然わたしも含まれていると思っていたらしい靱山は、驚いた顔をして、

「もちろん」

と答え、まりもは微妙な顔で、

「いいけど」

らいわれても。

「寧音ちゃん、まりもとふたりで兵器？」

今度はふたり宛ではなく、わたしだけ宛にこっそりメッセージが届いた。それにしても、兵器って、「平気」だよな。

靱山がこんなまぬけな変換ミスをするということは、シンコクな体調不良かもしれない。

「へーきー」

わたしは元氣よく返信した。

まりもは、オレンジ色のワンピースを着て、待ち合わせ場所に不機嫌な顔で立っていた。

「おそよよ」

「ごめん」

反射的に謝ってしまっただけで、念のため時計を確認したら、まだ待ち合わせ時間前だった。

「十一時っていつてたよね？ まだ十時五十八分だよ」

まりもは【Ⅰ】斜め上を見て、聞かなかったふりをしている。

「今日、本当に行く？」

乗り気じゃなさそうにまりもがいうから、さすがのわたしも【Ⅱ】した。

「まりもがインギンチャクが見たいっていつたから……」

「そうだけど」

いいたいことはわかる。靱山ぬきで、まりもとわたしとふたりきりで、本当に行くのか？ っていうことをいいたいでしょ。だってわたしは靱山のおまけなのだから。わたしは急にはかばかしくなってきた。

「じゃあ、いい。帰る。ひとりで行けば？」

わたしが怒ったのを見て、まりもはちよつと焦ったみたいだった。普段、わたしはまりもに怒ったりしないから。

「ひとりで行くわけないでしょ」

って。

けど、なによ？

わたしは聞き返さず、そのかわりにちよつと笑った。

どれだけまりもがわたしにそっけなくても、わたしは教室でまりもと靱山といることを選んでいる。なぜだろう。本当に、なぜ？

靱山やヒッキーといるときは、もっと気持ちが悪くなる。心があたたかくなったりするけれど、まりもといるときは、もっと気持ちが複雑になる。それが、なんていうか、とても気持ちいい。癖になるっていうか。まりもに冷たくされると、まりものがかかわりいよな気がしてきて、まりものことをもつと甘やかしてみたくなる。

これってちよつと危険な感じ。間違っているのはわかるのに、やめられない。

靱山もわたしと似ていて、まりもに対して、そういう複雑な感情を持っているような気がする。持て余しているっていうか……。

とても興味深い、わたしたちの、森まりも。

もうすぐ妹ができることを、わたしはまだまりもには話していない。

(中略)

日曜日。

事前学習によると、インギンチャクは英語でシーアネモネ、海のアネモネだ。ちなみにドイツ語だと、海のバラ。日本語だと、磯の巾着か。それはそれで悪くないと思うけど、花の名前にした方がきれいだった気がする。ちなみに「磯巾着」って春の季節らしい。すごい季節外れ。もう十一月だし。でもどうして春の季節なんだろう。

「えっ」

調べようとしてスマホを見たわたしは、ゼツクした。

いや、べつにインギンチャクの季語の由来が衝撃的だったわけではなくて、衝撃的なメッセージが届いていたからだ。

なんと、体調を崩した靱山は、本日のインギンチャクツアーに不参加とな。出発してか

わたしを帰らせるわけにはいかないみたいで、まりもはわたしの腕をぐいぐいひっぱってくる。なんなんだ、一体。

「前から疑問だったんだけど、まりもはどうしてそんなに自己中なの？」

わたしの声に、まりもは【Ⅲ】した顔で立ち止まる。かわいい顔が傷ついたように歪んだのを見て、わたしは残酷な気持ちになる。まりもはわたしから手を放して、その手で自分の髪の毛を触った。まりもの動揺したときの癖だ。

「寧音ちゃん、そんなふうに思ってたの？」

まりもがわたしの名前を呼ぶのは、とてもめずらしい。普段は全然呼んでくれない。

「みんなそう思ってるよ」

わたしは笑顔で答える。性格が悪いのは、まりもではなくて、わたしの方なのかもしれない。

「でも、それでもわたしや靱山は、まりもと一緒にいるのが好きなんだから、冷たいこといわないでほしい」

「冷たいことって……？」

本気でわからないという顔でまりもがいう。うそでしょ、とわたしは思う。

仕方ない。

「あのね、来た瞬間に『今日、本当に行く？』なんて不満そうにいわれたら、わたしとふたりきりで行きたくないのかなって、思っちゃうでしょう？」

わたしがいきかせるように伝えると、まりもは大きい目をさらに大きく見開いて、

「ごめん」と謝った。

「あと、靱山とわたしと三人でいるときに、靱山とふたりきりの約束をするのもやめてほしい。不愉快。無神経だよ」

まりもは泣いてしまった。

まりもをなだめすかしながら、わたしたちは電車に乗って最寄りの水族館までやってきました。このまま解散したら、靱山が責任を感じるかもと思ったので、水族館行きを中止するという選択肢は消すことにした。

ふてくされて口をきいてくれなくなりました。まりもは、入口付近で展示されていたペンギンを見て、ようやく機嫌を直したようだった。ペンギン様ありがとうと、わたしは心の中を手を合わせる。

目当てのインギンチャクは、次の水槽で見つかった。

「触手^{しゅくしゅ}って、なんだかセクシーじゃない？」

ガラスの向こうのインギンチャクを見ながら、なぜか小声で、まりもがいった。まりもその声の方がセクシーではないかしらと思いつつ、わたしは小声で返答する。

「そう？ どのへんが？」

「自分で考えてよ」

「ふーむ。でも、意外と人気あるんだね、インギンチャクって」

インギンチャクのいる水槽のまわりには、思いのほか人が集まっていた。

生き物にスマホをかざすと名前を教えるという便利なアプリがあつて、館内で無料体験中だったので試してみたところ、そのインギンチャクは「アジサイインギンチャク」という名前だった。磯の中着にも、さりげなく花の名前がついていたのだ。事前にネットの画像で見た印象より、かなり華やかだった。

わたしがインギンチャクを見直していると、横でまりもが「インギンチャクが人気なわけじゃないと思う」と首を振った。

「みんなクマノミを見に来ているんだよ。インギンチャクといえば、クマノミでしょ」

それは知っている。クマノミのデイズニアアニメも見ただことあるし。

「共生関係っていうんだっけ。クマノミにはインギンチャクの毒がきかないんだよね」

「どうしてきかないか、知ってる？」

わたしが知らないと答えると、まりも先生は得意げに教えてくれた。

「クマノミが体表から出す粘液^{ねんえき}の化学組成が、インギンチャクの粘液の化学組成に似ているんだって。それで、インギンチャクはクマノミをエサとニンジキできないの。つまりインギンチャクはクマノミに騙^{だま}されているってわけ」

「へえ。クマノミってかしこいんだね」

「違うでしょ。粘液の化学組成が似ていたのは、たまたま運がよかつただけじゃない」

しばらく無言で順路を進んだあと、巨大な水槽の中でふよふよとただよう、たくさん白いくらげを見ながら、わたしたちは靱山^{きんざん}について話を続けた。

「靱山はやさしいから、寧音ちゃんに声をかけたんだと思う。わたしの気持ちに気がついて、わたしとふたりきりでいたくなくなつたから」

それって、やさしい……？

わたしこそ、利用された気がしてしまう。

ああ、あのとき、あの夏の日、靱山はそのことをわたしににおうとしていたのかもかもしれないな。あのときのゼリーは、そういうゼリーだったんだ。あのゼリー、くらげにちょっと質感が似ていたな、なんて、くらげを見ながらわたしはほんやり考える。

この半年とちよつとの間、わたしたち三人はいつもなんとなく「奇妙^{きみょう}」で「不自然^{ふぜんぜん}」だった。その原因をつかんだような気がした。

わたしはゆっくり息を吸って吐いてから、まりもにいった。

「わたし、グループぬげようかと思うんだけど」

グループっていう単語はなんかちよつと違つ気がしたけど、他に表現しようもないので、とりあえず使ってみたら、やつぱりすごく違和感があつた。

わたしの提案に、まりもが横で固まった気配を感じたけれど、まりもの顔は見なかった。返事はなかった。

「まりもは靱山とふたりでいたらいいんじゃないかな。わたしは比企さんとふたり組になるよ」

「……なんでそんな意地悪^{いぢあく}いうの？」

また泣かれると困るので、わたしは慎重^{しんちょう}に取引を開始する。

「じゃあさ、比企さんがひとりで寂^{さび}しそうなときは、入れてあげてもいい？ いつもじゃなくていいの。比企さんはひとりであるのも好きみたいだから」

まりもは少し嫌^{いや}そうな顔をした。でも一瞬のうちに、嫌な顔をしてしまったことに自分で気がついて、さりげなく反省^{しんげん}したみたいだったから、わたしは気づかなかつたことにする。

「でも、クマノミはそれを利用したんでしょ？」

わたしが指摘^{しちま}すると、まりもは黙^{だま}った。

まりもはしばらく静かに水槽を見ていたけれど、やがて小さな声でこういった。

「インギンチャクは、クマノミなしでも、べつに生きていけるんだって」

「ふーん……」

その水槽の前からわたしたちがなかなか動かないものだから、後ろから来た大学生くらいのグループと、小さい子を連れた親子と思われる三人組が、わたしたちを避^さけて先に進んでいった。まりもは水槽にそつと顔を近づけて、なにを考えているかわからない顔をしている。

「でもクマノミはさ、インギンチャクがいないと、すぐに天敵^{てんてき}から見つかつて、食べられちゃうかもだよね」

まりもはかなり高い声をしている。かわいい声だけど、陰^{かげ}でぶりっこなんていわれてしまうのは、その声や、ねつとりとしたしゃべり方のせいもあるのかもしれない。さつきから「粘液の化学組成」という言葉が、わたしの頭の中にべつたりとはりついている感じがする。

そんなことを考えて黙っているわたしの横で、まりもは「インギンチャク論」を展開している。

「クマノミはインギンチャクのおかげで安全だけど、水族館には天敵がいらないだから、ちよつと事情が違ふと思うんだよね。クマノミのおかげで、インギンチャクは人から注目されているでしょ？ だからここではインギンチャクの方が得をしているわけ」

「だけど、インギンチャクは人間から注目されたいなんて、考えていないんじゃないかな」

「わたしね、靱山^{きんざん}のことが好きなんだと思う」

えっ。わたしはちよつとびつくりして、まりもの横顔をまじまじと見た。

「えっ？ ……えっ？」

「だから、靱山^{きんざん}のことが好きなんだってば」

「……わたしも靱山^{きんざん}のことは好きだよ」

「そういうんじゃないって」

まりもはわたしの足もとを見つめながら答えた。

「いいよ」

「それなら、三人でいる。これからも」

取引成立だ。

わたしたちは握手^{あぐし}をした。まりもの手は、なんだかひどく温^ぬつていた。

水族館の売店で、靱山^{きんざん}へのおみやげのインギンチャクグッズを選びながら、わたしはまりもに伝えた。

「わたしね、もうすぐ妹^{いもうと}ができるんだ」

そうしたらまりもが、「うん、靱山^{きんざん}に聞いた」っていったから、わたしはちよつとショックだった。

「うそ。野乃^{のの}のことも聞いた？」

「え？ ノノノ？」

まりもはきよとんととしてから、インギンチャクの小さなぬいぐるみをわたしに見せた。

「これ、よくない？」

「いいんじゃない？」

「で、ノノノってなに？」

「なんでもなく」

「なによう」

まりもはほつぽをふくらませて、いじけている。わたしはヒッキーにも、同じぬいぐるみを買うことにした。

靱山^{きんざん}め。なんだかんだいって結局のところ靱山^{きんざん}は、まりものことが大事なんだと思う。

新しくきょうだいができるなんてことは、きつとそういうことなんだろっ。つまり、特に隠^{かく}すようなことじゃないってこと。

奈菜ちゃんの出産予定日までは、あと三か月ちよつとだ。ふと思いついて、わたしはインギンチャクをもうひとつ追加した。

まりもに野乃^{のの}のことは話さなかった。それでいいような気がした。

問一

線①～④のかたかなをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二

線①～③の文中でのことばの意味として最も適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 投げやり

② 持て余す

A 不安になること

A 思うままに扱う

I 急にいらだつこと

I 扱いに困る

ウ 相手に気を配ること

ウ 気持ちに余裕がある

E いい加減に行うこと

E 嫌気がさす

③ くだめすかす

A 相手の機嫌を損ねたことを許してもらおうこと

I 気分を害した相手はずっとすねていること

ウ 機嫌をとって相手の気持ちを和らげること

E 相手をおだててこちらの思い通りにさせること

問三

線①「そういう接し方」とありますが、まりもがわたしにどのような接し方をしているかわたしは感じているのですか。二十字以内で考えて答えなさい。

問四

【I】～【III】にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A ハットと イ ボートと ウ ツンと E イラッと

問五

次は本文についての生徒A・B・Cたちの話し合いです。文中の(1)～(5)に入る人物名を左のA～Eの記号でそれぞれ答えなさい。また【あ】【い】【う】に入る適切なことばを指定の字数で考えてそれぞれ答えなさい。

A 寧音 イ 靱山 ウ まりも E 比企さん

A 女子三人組ではよくある関係ですね。

B 四人組なんじゃないの？

C (1) はいつも一緒ではないみたいです。寧音はまりもに対する感情が複雑です。

B 普通ならまりもを嫌ってもいいのに、1ページ下段「冷たくされると、まりものこ

B わたしたちが使ってる「共生」と生物学的な「共生関係」は違うってことね。

A 生物学的共生関係が寧音たちの関係にも見られないでしょうか。

B じゃあ、インギンチャクは誰をさしているの？

C まりものセリフだけで考えてみると3ページ下段「インギンチャクはクモノミなしても、べつに生きていけるんだって」でもクモノミはさ、インギンチャクがいないと、すぐに天敵から見つかって、食べられちゃうかもだよ」とあります。

A もともとまりもは靱山と一緒に水族館に行きたかったんですよね。

C そこでインギンチャクと一緒に見たかったのかな。

C そうしてみると、まりもの中ではインギンチャクは(2)、クモノミは(3)を表しているのではないのでしょうか。

A また寧音の中では、インギンチャクの特徴と声のイメージを重ね合わせているから、インギンチャクはまりもをイメージしているのが読み取れます。

C 4ページ上段「わたしたち三人はいつもなんとなく『奇妙』で『不自然』だ」ともあるように、寧音とまりもの関係は、かみ合っていない様子がわかります。

A 寧音は(4)に利用されたり、(5)に変な態度をとられても、この関係から離れないでいますしね。こうしてみると「共生関係」は実に複雑でまさに「共に生きていく」関係を表していますね。

問六

線③「わたしね、もうすぐ妹ができるんだ」とありますが、線②では「わたし」は妹ができることをまりもに話していません。「わたし」が妹のことを直接まりもに話すことができたのは、「わたし」のまりもに対する気持ちがどのように変化したからですか。答えなさい。

とがかわいような気がして……甘やかしてみたくなる」のはどういう気持ちのあらわれなの？

A クラスの他の子からは好かれていない感じですが、寧音や靱山はまりもに対して

【あ(二字)】があることがわかります。それはこの二人にはまりもと仲良くしたいという気持ちがあるのだと考えます。

B でも「インギンチャクツアー」の時は、寧音は【い(十字以内)】様子だね。

C その後の水族館でのインギンチャクとクモノミの共生関係は彼女たちの関係をも表しているように読み取れるんですよね。

B でも「共生」ってお互いに利益を得てる関係のことじゃないの？

A 「共生」の意味を調べていたら、興味深い文章に出会いました。深津武馬著「共に生きる」ということの本質」によればクモノミとインギンチャクの関係は、実はインギンチャクが損をしていて、クモノミはインギンチャクの触手を食いちぎったりもするようです。

こういう話をすると、必ず「その関係は『共生』というよりは、むしろ『寄生』ではないのですか？」という質問が飛んでくる。両方とも得をしているならともかく、片方が搾取されているような寄生と呼ぶべきではないかというわけである。このような問いに対して私は「共生関係というのは状況によって『相利』的になったり、『寄生』的になったりすることがあるのです」「共生」と『寄生』は決して対立概念ではなくて、前者が後者を含むものなのです」と答えることにしている。

一般社会ではお互いが利益を得ているような関係をイメージして「共生」という言葉を使っている。しかし正しい生物学用語では、そのような関係はより厳密に「相利」と表現する。生物学における「共生」とはもっと広く、文字通り「共に生きていく」関係をあらわす言葉なのである。

〔深津武馬「共に生きる」ということの本質」より〕

次の文章は、古田徹也『いつもの言葉を折り返す』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

設問の都合により本文には一部省略や改変があります。また、文中の難しいことばには※()の形で注を付けてあります。

十九世紀末から二〇世紀前半にかけてオーストリアなどで活躍した作家カール・クラウスは、その生涯を通じて「言葉の実習」と題したエッセイを発表し続け、母語の言葉にあらためて注意を傾けることの重要性を説き続けた。個々の言葉の微妙なニュアンスを、比較や例示などを通して具体的に浮き彫りにしていく作業を続けたのである。

クラウスが取り組んだ類いの実習を日本語に関して行うことも、もちろん可能だ。たとえば、三浦しん著『広辞苑をつくるひと』の第一章には、その種の「言葉の実習」に該当する恰好の※()とあてはまる事例を見出すことができる。

同章には、『広辞苑』第七版の編纂(※編纂)にかかわる改訂作業、とりわけ、語釈(※語釈)の意味の解釈・説明の再検討に携わった人々に取材した内容が収められている。取材対象は、動詞の語釈を担当した、日本語学が専門の柏野和佳子さんと田嶋明日香さん、英語学が専門の平本智弥さんの三人のチームだ。

このチームによる再検討の組上に載った※取り上げられた問題のひとつが、「見極める」と「見定める」の違いだ。

(中略)

ほかに「()する」「()する」「()する」「()する」などの語釈を再検討するのにも、このチームの役割だった。

(中略)

私が特に面白く感じたのは、「炒める」の語釈の再検討だ。改訂前の第六版では、この言葉はこう説明されている。

「炒める」:

食品を少量の油を使って加熱・調理する。「ほうれん草を炒める」

っている言葉だ。つまり、私たちは日々の生活で、これらの言葉を使いこなし、これらの行為を繰り返しているはずだ。ただ、それでも、ここまで見てきた語釈によってはじめて気づくことがある。「炒める」や「なめる」ですら——いや、むしろ、そうした言葉こそ——私たちは目をとめていないのだ。知っているはずの言葉に注意を傾け、言葉を言葉で表現することは、私たちの生活について、私たちが普段していることについて、私たち自身の理解を広げ、その奥深さや面白さを再発見させてくれるのである。

それから、十全な※(完全な)語釈を探究することは、再発見だけではなく、新発見をもたらす可能性もある。従来の「炒める」の語釈が①「ヒンジャク」なものだったことは先に確認したが、『広辞苑』に限らず他の辞書でも、カシ用語には不十分さや抜けが散見される※目につくという。これはおそらく、カシをあまり担当しない男性が辞書の語釈を担当するケースがこれまで多かったからだと思像できる。この点でいえば、今回の『広辞苑』第七版の動詞の語釈を女性二人のチームが担当したことには大きな意味があったと思われる。今後も、多様な属性や背景をもつ人々が語釈の再検討に加わることによって、従来は看過された※(見過ごされた)がちだった側面に光が当てられ、私たちの生活のかたちがより豊かに照らし出されていくだろう。

(中略)

ところで、先述のカール・クラウスは、言葉に目を凝らし、耳を澄ませ、用いるべき言葉を思慮深く選び取ることは、私たちが果たすべき真に重要な責任であるものの、あまりに軽視されてしまっていると指摘している。そして、言葉に注意を傾け、しつくりくる言葉を選び取るうとする際に生まれる()これではまだしつくり()ない()これでは……過ぎる()といった迷い・疑いを「道徳的な贈り物」と呼んでいる。これにはいくつかの意味合いが含まれているだろう。

ひとつは、私たちが受け継いでいる文化遺産としての言語には、「駆ける」と「走る」など、無数の類似した言葉が含まれ、互いに複雑に連関(※関連)し合っているということがある。()しつくり()ない()むしろも違()といった迷いは、類似した言葉の間でしか生まれにくい。私たちは、迷い、ためらうことを可能にする言語を贈られているのである。

それから、この迷いの感覚がとりわけ道徳的な贈り物であるのは、私たちが紋切り型

この語釈は明らかに不十分なものだ。これでは「(4)」との違いが全く見えない。「炒める」とは何かをめぐる田嶋さんの探究の過程を描く、三浦しんさんの筆致(※)のような書き方をしたか、を追ってみよう。

田嶋さんは、「炒める」の真髓(※本質、核心)を見極めるべく、メモ帳を携えて日々炒め物を作りまくった。……料理をしていないときも、エアフライパン片手に、「炒める」動作をしまくった!

田嶋「そうするうちに、『炒める場合、ひとかたまりの食材ではなく、細かく切ったあることが多いな』とか、『焼く場合よりも、食材を動かすよね』といったことがわかってきました。……ただ、『炒める』際の動作を、短い文章でどう表現したらいいかが、また難問でした。……『かき混ぜる』という言葉を使うと、どうしてもスクランブルエッグとかのイメージになっちゃうかなど。」

どのような天啓が降ってきたのか、それは、第七版に採用された以下の「炒める」の新語釈を確認すれば一目瞭然だ。

「炒める」:

熱した調理器具の上に少量の油をひいて、食材同士をぶつけるように動かしながら加熱・調理する。「ほうれん草を炒める」

つまり、「食材同士をぶつけるように動かす」という、(5)ことにより、語釈が以前よりも遥かにアップグレード(※改良)されたわけだ。

以上の語釈再検討の実践には、重要なポイントが(6)に含まれている。

「炒める」の語釈の再検討を通じて、この感覚が抵抗を示してくれるからだ。日々のコミュニケーションにおいて、(6)「ありがちな言葉をテンポよく繰り返しているとき、私たちはしばしば思考停止している。逆に、迷いを常套句(※しつくり)でやり過ぎず、言葉同士の繊細なニュアンスの違いを感じ取り、意識的にぴったりの言葉を探すことは、自分自身の思考を開くことにつながる。」

しつくりくる言葉を選び取るうとしているとき、私たちは基本的に、自分にとって既知の言葉の間でしか迷えない。つまり、しつくりくる言葉の「コウホ」は、自分がこれまでの生活のなかで出会い、馴染み、使用してきたものたちなのである。それゆえ、そうした言葉の探索は自ずと、これまでの自分自身の来歴と、自分が営んできた生活のかたちを、部分的にでも振り返る実践を含んでいる。

よく、「自分の言葉で話さない」ということが言われ、(7)「創意のある言葉やユニークな言葉を繰り返すことが無闇に推奨されることもあるが、『自分の言葉で話す』というものは必ずしもそういうことではない。むしろ、(8)「ありがちな言葉であっても、数ある馴染みの言葉の中から自分がそれを()しつくりくる言葉として選び出すのであれば、そのこのうちに、これまでの来歴に基づく自分自身の固有なありようや、自分独自の思考というものが映し出される。逆に、(9)「お約束」に満ちた流暢な話し方や滑らかな会話は、()ういう場合は人は、()言つものだ、()言つのが世間では正解だ」という暗黙の基準にしばしば支配されている。それが常に悪いわけではないが、しかしそのときには、言葉に責任をもつべき自分がそこに存在しないことも確かなのである。

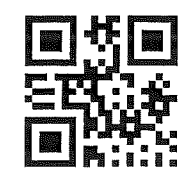
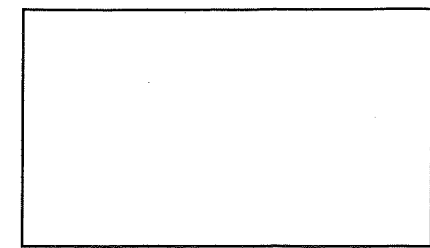
私たちの生活は言葉とともにあり、そのつどの表現と対話の場としてある。言葉を雑に扱わず、自分の言葉に責任をもつこと、言葉の使用を規格化やお約束、常套句などに完全に委ねてはならないこと、(10)「これらのことが重要なのは、言葉が平板化し、表現と対話の場が形骸化し、私たちの生活が空虚なものになること——ひいては、私たちが自分自身を見失うこと——を防ぐためだ。」



1				問六	問四	A	問三	問二		①	問一
50				問六	問四	A	問三	問二		①	問一
						B				②	
						C				③	
						D					
						E					
						F					

I	問四	問三		①	問二	④	①	問一
II	問四	問三		②	問二	④	①	問一
III				③			して	
				②			③	

↓枠の中にシールを貼ってください↓



232110

一〇二二三年度
国語解答用紙

受験番号

--	--	--	--

氏名

--

2023K-①

2				問七	問八	問九			
50				問七	問八	問九			
							共通している内容		
							短歌の部分		

問六		い	あ	1	問五
問六		い	あ	2	問五
				3	
				4	
				5	

